「べし」の通時的変化

山口堯二

一　はじめに
二　「べし」の意義分類
三　意義別に見た分布の推移
四　形態と意義から見た分布の推移
四の一　上接語・下接語の分布から
四の二　その他の共起関係から
五　おわりに

中世の「べし」は文語化していくが、その通時的変化には微妙でめだちにくい点がある。その変化を探るために、『蜻蛉日記』『源氏物語』『覚一本平家物語』『太平記』『御伽草子』について、いずれもテキストの最初から百例目までの用例における意義別・形態別の分布を調べ、その分布状態の相違を総合して、通時的変化の方向をうかがうことにした。意義については、対象的意義と作用的意義の両立性に注意して、独自に分類した。各テキストにおける文体の揺れも少なくはないが、中世の「べし」には、現実的な表示性が後退し、観念的な表示性が強まって、反語・否定・意志・勧誘・命令などに用いられる傾向がめだってきている。形態的には、中古のほうが、上接語・下接語に種々の広がりが見られ、中世には相対的に用法の狭まる傾向がうかがえる。

一　はじめに

狭義の推量の助動詞については、その体系が通時的にどのように変化してきたかについて、概要をまとめてみたことがある。[1] その折、古代語の体系では事態の対象的側面の表示性と、想定的ムード的な作用的側面とが濃く融合していたことや、中世口語を経て近現代語では、その融合性が薄れて、ムード形式化が進行したことを述べた。狭義の推量の助動詞が、近現代語にかけてそれまで保たれていた連体法や準体法を失っていったのも、その対象的側面を後退させ、作用的側面を高めた結果と考えたのである。

しかるに、広義の推量の助動詞の中でも、事柄のありようにより高い蓋然性を認める推定の助動詞においては、その体系全体として、対象的側面と作用的側面との融合性は、通時的にもむしろ大きくは変わらずに維持されてきたようである。ここに取り上げる「べし」もその一つであるが、「べし」には特に活用形もよくそろい、文語的には中世においても、連用法・連体法がともに維持されている。現代語にも、その語形の一部を残しているほどである。しかし、それだけにその通時的変化には微妙でめだちにくい点があるから、「べし」の通時的変化を探るには、とりわけその意義の対象的側面と作用的側面の両者に、なるべくもれなく注意する必要があるだろう。

「べし」の意義・用法については、中西宇一氏の「様相的推定」と「論理的推定」に大別する説がよく知られる。[2] 筆者もその影響を受けた一人ではあるが、対象的側面と作用的側面の区別を必要と考える点では立場を異にするので、ここでは通説も考慮しながら、独自に私見をまとめることにする。意義は形態によって支えられるから、形態の面についても、品詞別などによる上接語・下接語をはじめ、「べし」と共起しやすい語について、その通時的な変化を探る必要があるだろう。

しかし、古代語や中世語において入手できる「べし」の用例数はあまりに多い。たとえ作品はしぼるにせよ、用例の全数調査を企てて取り組むほどの余裕はない。そこで本稿では、時代的な推移を探る手掛りとして、『蜻蛉日記』（『蜻蛉日記全注釈』、角川書店）、『源氏物語』（新編日本古典文学全集、小学館）、『覚一本平家物語』（日本古典文学大系『平家物語』、岩波書店、以下『平家物語』と呼ぶ）、『太平記』（日本古典文学大系、岩波書店）『御伽草子』（日本古典文学大系、岩波書店）というテキストを選び、用法の数量的な分布については、各作品、および、作品集（『御伽草子』）の、最初から数えて百例の中での分布のみを調べることにした（これらの作品、および、作品集を、

以下、「作品（集）」と略称する）。百例にしたのは、およその見当がつきそうな、切りのよい数というまでである。参考までにいえば、『更級日記』の「べし」の用例は、全体で七十二例である。百例という数は、それをゆうに越えるのである。それで十分とは言えないにせよ、一応の見通しは立てうる例数と見なすのである。

各作品（集）別にその百例目の位置を示せば、『蜻蛉日記』は、中巻の天禄二年二月の記事、『源氏物語』は、帚木の巻における左馬頭の指喰い女の体験談の途中、『平家物語』は、巻二の「座主流」の末尾、『太平記』は、巻二の「主上臨幸依レ非二実事一山門変儀事」の最初の段落、『御伽草子』は、「御曹司島渡」の後半、天女が大王の都から逃げ帰る手段を教えるくだりまでとなる。

なお、研究の手順としては、まず形態面から通時的変化の方向を調べたが、結果からいえば、意義面についての調査のほうが、推移の方向を知る上ではより示唆的であった。そこで、本稿の論述は、意義面の分類に基づく分布調査と、その結果得られる変化方向の見通しをまず述べ、そのあと、形態面についての調査結果を報告して、その見通しの確認・補強に役立てることにする。

中世の文献の用語には、次第に文語化が進み、口語との開きが拡大していく。調査対象に選んだ作品（集）のうち、中世の三点も、もちろんその例外ではない。したがって、本稿の調査は、より口語的であった中古の「べし」が、次第に文語化していく、その過程において、どういう方向に変化していくかを探ることになる。口語の世界における変化を直ちに探れる資料がきわめて乏しい現状では、その方法によるのが最も有効ではないかと思うのである。

二　「べし」の意義分類

推定の助動詞において、対象的側面と作用的側面とが一般に融合的であることは、すでに述べた。「べし」の意義については、その対象的側面と作用的側面をそれぞれに区別する必要がある。

「べし」の作用的側面の特徴は、何よりもある事柄を論理的に当然のこととして推定するムード的な作用にあるといえよう。一般に推量の助動詞と呼ばれているのも、そのムード的な作用に目を付けてのことである。そのような事柄めあての推定作用を「推定」と呼ぶことにしよう。しかし、「べし」も、対象のありようから離れて、そのような推定だけを担っていると見るべきではなかろう。その推定は、その対象になる事柄と多かれ少なかれ常に融合していると見るべきである。まず一例をあげて、その点を少し押さえておく。

(1)ほどへて、たしかなるべきたよりをたづねて、かくのたまへり。（蜻蛉・中・安和二年七月）

たとえばこの例の「たしかなるべき」には、そのまとまりにおいて、確かに相手に届くはずだと推定される事柄のありようという対象面と、そのはずだという作用面の推定とが融合している。その下の「たより」を修飾し限定しているのは、どちらかといえば、「たしかなるべき」に融合している、その対象面のありようのほうであると見てよい。この例のような連体法では、一般にそこに融合している対象的側面のほうが概してめだちやすいからである。しかし、そのめだちやすさに差はあるとしても、「べし」における対象面の意義と作用面の意義とは、何らかの程度において常に融合し両立しているから、「べし」の意義の特徴はその両面から捉える必要があるのである。

「べし」の意義は、知られるようにかなり多義的である。意義の多様性は、推定を基本とする作用面にも認められるが、どちらかといえば、推定の対象となる対象面の事柄のありようのほうがより多義的であり、推定を基本とする作用面のムード的な働きも、対象面の事柄の多義性と切り離しては考えにくい。以下、対象面の事柄のありようと、作用面のムード的な働きとは、それぞれまとめて対象的意義・作用的意義と呼ぶことにする。

さて、「べし」の推定の対象となる事柄のありよう——推定対象——対象的意義には、事柄の現実的なありようと、観念的なありようとを大別することができる。

現実的なありようには、さらに非時間的、ないしは、現存的なありようと、時間の経過を成立要因とする将来的なありようとが区別できる。

そのうち、非時間的、ないしは、現存的なありようの推定対象は、その意義の特徴から「状態」と呼ぶことにしよう。

以下、意義分類の方法を述べる際の用例の引用は、本稿の中心となる分布調査のテキストの範囲の例に限らず、上代の資料をはじめとして、なるべく広い範囲から引くことにする。

(1)の形容動詞に付いた例も、その状態を対象的意義とするものであるが、次に示すように、形容詞に付いた例(2)や、「あり」などの自動詞に付いた例(3)に、この意義のめだつ例が多い。

(2)物皆は新たしきよしただしくも人は古りにしよろしかるべし（応レ宜）（万葉・十・一八八五）

・こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。（土佐・十二月二十六日）

・人の品たかく生まれぬれば、人にもてかしづかれて隠るること多く、自然（じねん）にそのけはひこよなかるべし。（源氏・帚木）

(3)法を勘ふるに、足嶋も罪あるべし（在倍之）。（続紀・宣命・五三）

・さるべき契りこそはおはしましけめ。（源氏・桐壺）

・「縦ひと日かた時にてさぶらふとも、ありがたうこそさぶらふべきに、まして三とせが命をのべて給らむ事、しかるべうさぶらふ」とて、（覚一本平家・一・願立）

(3)の第三例の「しかるべう」は、先行文脈の「ありがたう」をうけて用いられている。

「べし」が指定の助動詞「なり」に付いた、次のような「なるべし」の形には、推論的な判断のありようもめだつが、それは助動詞「なり」の働きに依存してのことであるうえ、本稿の通時的な分布調査では、特に区別ほどの意味は見出せないと見たので、ここではその対象的意義も、状態の中に含めることにする。

(4)このうたは、みやこちかくなりぬるよろこびにたへずして、いへるなるべし。（土佐・二月七日）

・鳥の二三ゐたると見ゆる物を、しひて思へば、釣り舟なるべし。（蜻蛉・中・天禄元年六月）

時間の経過を成立要因とする将来的なありようには、事態の具体的な実現が実質的に見込まれるありようと、逆に事態の実現は形式的にしか見込まれない、たんに可能的なありようとが区別できる。

そのうち、具体的な実現が実質的に見込まれるありようには、自然的な変化やものごとの成り行きが原因である場合と、むしろ人為的社会的に見通される予定が原因である場合とがある。しかし、それらの場合における推定の対象は、ともに将来的に成立する結果にあると見うるうえ、本稿の分布調査では、その差はあまり積極的な意味をもち得ないと考えたので、この調査のために推定対象を区別する対象的意義としては、変化やなりゆきの結果と、人為的な予定の結果とを併せて、「結果」と呼ぶことにする。

結果を対象的意義とする例と見うるのは、たとえば次のようなものである。例(5)のように、形容詞に付く形にも、例(6)の動詞・助動詞に付く形とともに、この意義のめだつ例が少なくない。

(5)宵々に我が立ち待つにけだしくも君来まさずは苦しかるべし（応二辛苦一）（万葉・十一・二九二九）

・露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく（古今・秋下）

(6)雲に飛ぶ薬食むよは都見ばいやしき我が身またをちぬべし（越知奴倍之）（万葉・五・八四八）

・このときのところに、子うむべきほどになりて、（蜻蛉・上・天徳元年夏）

・つひに世の中を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらずおされたまへり。（源氏・桐壺）

事態の実現が形式的にしか見込まれない事柄のありようは、事柄を可能的に取り上げるにとどまるものである。そのようなありようの対象的意義は、通説に従い、「可能」と呼ぶことにする。次はその一例である。

(7)常世辺に住むべき（可レ住）ものを剣大刀汝が心からおそやこの君（万葉・九・一七四一）

・「…あはれ、死ぬとも、おぼし出づべきことのなきなむ、いと悲しかりける」とて、（蜻蛉・上・康保三年三月）

・誠ニ理世安民ノ政、若機巧ニ付テ是ヲ見バ、命世亞聖ノオトモ称ジツベシ。（太平記・一・関所停止事）

対象的意義としての可能は、事態の実現が形式的にしか見込まれないありようであるが、次に述べる適当や当為という、観念的なありように対しては、なお現実的なありようの一つと見るべきであろう。

次に、推定対象となる事柄の観念的なありようには、さらに二つのありようが区別できよう。複数の動作的な選択肢の中での、相対的に最も適当なありようと、むしろ絶対的になすべきありようとである。相対的に最も適当とされる推定対象は、「適当」と呼び、絶対的になすべきありようとしての推定対象は、「当為」と呼ぶことにする。これらの対象的意義は、すでに取り上げた現実的なそれに比べると、抽象度の高いものになるが、それは対象の捉え方が観念的であることに伴うものである。

なお、細かくいえば、すでに取り上げた現実的な事柄を推定対象とする場合の推定を認知的なそれとすれば、推定対象が観念的である場合の推定には、その作用自体にいわばよりよき道を求める主体の情意が濃くなる傾向もあるだろう。そのことが後述する意志・勧誘・命令などの対人的な作用的意義をそこに両立させる理由にもなるはずである。

適当を対象的意義とする例は、たとえば次のようなものである。

(8)謀叛の事に預りて隠して申さぬ奴等、粟田広上・安都堅石女は、法の随に、斬の罪に行ひ賜ふべし（行賜之倍）。然れども、思ほす大御心坐すに依りて、免し賜ひなだめ賜ひて（続紀・宣命・五三）

・なほかくてぞあるべかりけるを、（蜻蛉・中・安和二年一月）

・「…次に刀の事、主殿司にあづけをきをはンぬ。是をめし出され、刀の実否について咎の左右あるべきか」

と申。しかるべしとて、其刀を召出して叡覧あれば、（覚一本平家・一・殿上闇討）

適当を推定対象とする場合の動作的な選択肢には、話し手の動作も含まれる。その対象が話し手の動作で、かつ、それが将来に見込まれる場合には、進んでその動作をしようという話し手の意志も、その推定という作用的意義と両立して認められることになる。そのような作用的意義を「意志」と呼ぶ。

作用的意義としての意志の認められる例には、次のようなものがある。

(9)三千年を見つべき身には年ごとにすくにもあらぬ花と知らせむ（蜻蛉・上・天暦十年三月）

・講堂中堂すべて諸一宇ものこさず焼払て、山野にまじはるべき由、三千一同に僉議しけり。（覚一本平家・一・内裏炎上）

適当を推定対象とする場合の動作的な選択肢には、聞き手の動作も含まれる。その対象が聞き手の動作で、かつ、それが将来に見込まれる場合には、その動作を聞き手に勧誘する話し手の働きかけも両立して認められることになる。そのようにして推定と両立する作用的意義を「勧誘」と呼ぼう。

作用的意義の勧誘が認められる例には、次のようなものがある。

(10)御輿さしよせて、「とう〳〵めさるべう候」と申ければ、（覚一本平家・二・一行阿闍梨之沙汰）

・これより都へは、順風よくして七十余日、たゞ世の常の船路ならず。同じくは是にとどまり給ふべし。（伽・御曹司島渡）

次のように「べし」が打消の助動詞を伴うと、その意義は行為の中止などを勧誘するものになる。

(11)「…いまだ二代の后にたゝせ給へる例をきかず」と、諸卿一同に申されけり。上皇もしかるべからざる由、こしらへ申させたまへば、（覚一本平家・一・二代后）

対象的意義が当為と見うるのは、事柄がその状況下において不可避であり、絶対的に必要である場合や、その行動を拘束する義務・倫理などのめだつ場合である。すでに取り上げた対象的意義の適当との区別が、解釈によって揺れる例もなくはないが、当為の例と認められるのは、たとえば次のようなものである。

(12)ますらをは名をし立つべし（立倍之）後の世に聞き継ぐ人も語り継ぐがね（万葉・十九・四一六五）

・さいふ〳〵、ものかたらひおきなどすべき人は京にありければ、（蜻蛉・上・康保元年七月）

・大塔宮ヲ死罪ニ所シ奉ルベキ也。（太平記・一・僧徒

六波羅召捕事付為明詠歌事）

第二例の「ものかたらひおきなどすべき人」は、作者が遺言をしなければならない相手の兼家をさす。

当為を推定対象とする場合の動作主が聞き手の場合には、その動作を聞き手に命令する話し手の働きかけも両立して認められることになる。そのようにして推定と両立する作用的意義を「命令」と呼ぼう。命令の意義の認められる例には、たとえば次のようなものがある。

⒀剣大刀いよよ研ぐべし（刀具倍之）いにしへゆさやけく負ひて来にしその名そ（万葉・二十・四四六七）

・御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。（源氏・桐壺）

・是によッて、源平両家の大将軍、四方の陣頭をかためて、大衆をふせくべき由仰下さる。（覚一本平家・一・御輿振）

次のように「べし」が打消の助動詞を伴うと、その表現は行為を禁止するものになるが、「べし」の作用的意義としては、その場合も命令に含めて扱う。

⒁「是は汝がもとどりと思ふべからず。主のもとどりと思ふべし」といひふくめてきッてンげり。（覚一本平家・一・殿下乗合）

対人的な命令が、当為を推定対象とする場合の推定と両立しうる作用的意義なら、話し手の動作についても、逆に即自的な意志という作用的意義が、その推定と両立しうるとも考えられそうである。しかし、意志という作用的意義については、すでに適当を推定対象とする場合の推定と両立するありようと認めている。適当と両立する意志と、当為と両立する意志とを区別するのは、事実上不可能であるし、意志のより本源的な姿は、前者と考えられるので、しばらく当為の推定との両立は、考えないことにする。

なお、適当の推定と両立する聞き手めあての働きかけを勧誘とし、当為の推定と両立する聞き手めあての働きかけは命令としたが、この差についての解釈は、事柄における複数の選択肢の有無を主な基準としたものである。話し手と聞き手の身分差などにまで立ち入れば、事柄自体に選択肢はあっても、表現上命令ととれる場合も当然あり得ようが、本稿の分布調査ではそこまで立ち入っては区別していない。

「べし」の作用的意義は、事柄めあての推定を基本とするが、対象的意義のありよう次第で、さらに話し手にとっての即自的な意志や、対人的な勧誘・命令が両立しうると見てきた。意志・勧誘・命令ついては、事柄めあての推定に対して、以下まとめて、対人的な作用的意義と呼ぼう。この場合の「対人的」は、話し手にとっての即自的な作用

を含めた、やや広義なそれになる。

以上に述べた「べし」の各意義の相互関係を、対象的意義の別を中心にまとめて表示すると、次のようになる。作用的意義は、両立する対象的意義の下に、それぞれ（　）に入れて付記する。

- 現実的
  - 非時間的・現存的 ―― 状態（推定）
  - 将来的
    - 実質的 ―― 結果（推定）
    - 形式的 ―― 可能（推定）
- 観念的
  - 相対的 ―― 適当（推定・意志・勧誘）
  - 絶対的 ―― 当為（推定・命令）

三　意義別に見た分布の推移

このような意義分類のもとに、まず「べし」の通時的な変化の方向を探ってみよう。すでに述べた作品（集）ごとの百例を、まず対象的意義のみによって分類すれば、表一のようになる。

		蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
現実的	状態	35	25	15	21	15
	結果	35	36	31	33	16
	可能	15	19	8	13	20
観念的	適当	6	16	19	11	34
	当為	9	4	27	22	15
計		100	100	100	100	100

表一　対象的意義別の分布

この表一を通して、まず感じるのは、各作品（集）ごとの文体による揺れの大きさである。この表の分布を眺めるだけで、通時的な変化の方向が、すぐにつかめるとはいいがたい。しかし、これだけでも、次のような通時的変化をうかがうことはできよう。

ア　中世には、状態を推定対象とする割合が減少している。

イ　中世には、当為を推定対象とする割合が増加している。

そのうち、イに指摘する当為の増加については、「べし」の通時的変化に、その当為を中心とする、観念的な意義の強化もうかがえる点がある。試みに表一の対象的意義の別による分布を、その意義

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
現実的	85	80	54	67	51
観念的	15	20	46	33	49

表二　対象的意義の大別による分布

が現実的か観念的かに大別して集計し直せば、次の表二のようになる。以下、合計が百になる場合は、「計」の欄を省略する。

作品（集）別の揺れも大きいとはいうものの、表二には、大観して次のような傾向がうかがえるだろう。符号は、表一についての指摘に続く、通し符号で示す。以下、同じ。

ウ　中世には、現実的な事柄を推定対象とする割合が減少し、観念的な事柄を推定対象とする割合が増加している。

なお、適当を推定対象とする例には、意志・勧誘・命令という対人的意義の両立することがあり、当為を推定対象とする例には、命令という対人的意義の両立することがあった。そのそれぞれについて、それらの対人的意義が両立する例と、両立しないその他の例との分布を併せて示すと、次の表三のようになる。

		蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
適当	意志	0	2	4	5	27
	勧誘	0	0	1	0	2
	その他	6	14	14	6	5
計		6	16	19	11	34
当為	命令	1	1	10	15	11
	その他	8	3	17	7	4
計		9	4	27	22	15

表三　対人的意義の両立

表三によれば、次のような通時的変化がうかがえよう。

エ　中世には、意志・勧誘・命令の意義が両立して認められる例の割合が、それぞれ増加している。

意志の増加は、『御伽草子』において最もめだち、その他の割合を圧倒している。その点から見て、「べし」による意志の表示性は、極めて明示的になっていると見てよかろう。たとえば、次のような例においても、推定対象としての適当の意義のほうが、すでに薄れているようにさえ感じられる。

(15)「あるじ関白と申す事の候へば、まづ飲み候べし」とて、三度飲み

て後に、中将殿に参らせければ、（伽・文正さうし）

命令の増加についても、『太平記』『御伽草子』では、命令の意義の両立する例が、当為を推定対象とする例の半数を越えるに至っている。その意味で、表一・イに指摘した、当為を推定対象とする割合の中世における増加自体も、命令性の両立による点があると見てよい。勧誘の例の増加は、意志・命令ほどにはめだたないが、傾向としては同じ方向にあると見てよかろう。そこで、表三・エの指摘をもとに、対人的な作用的意義の分布を総括すれば、中世には対人的な作用的意義の両立する傾向が全体にめだってきた、ということができる。

この対人的な作用的意義の両立傾向は、観念的な意義の強化傾向とともに、志向的な情意の表示性も、「べし」にめだってくることを示すものであるが、後述する反語表現・否定表現における使用の増加傾向も、それと共通する変化の方向性を示すものであろう。しかし、その点については、次に形態別の分布調査の結果を述べてから、それと絡めて触れることにしよう。

四　形態と意義から見た分布の推移

四の一　上接語・下接語の分布から

まず、「べし」の上接語・下接語の分布を調べて、すでに得た意義別の調査結果と照らし合わせてみよう。上接語について品詞別に調べた結果を、表四に示す。

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
動詞	52	61	72	74	92
形容詞	13	7	9	2	3
形容動詞	2	3	2	1	0
助動詞	33	29	17	23	5

表四　上接語の品詞別分布

表四によれば、上接語の分布について通時的変化が比較的めだつのは、次に三点であろう。

オ　動詞に付く例が増加傾向にある。

カ　形容詞・助動詞に付く例が減少傾向にある。

このうち、カに指摘する形容詞に付く例の減少傾向はすでに述べた意義別の分布について、表一・アに指摘した、状態を推定対象とする割合の減少[3]に、最も関係があるだろう。形容詞に付く例は、結果を推定対象とするものにもあるが、その分布にも、僅かながら減少傾向がうかがえた。

助動詞については、さらに語別の分布を次の表五に示す。ただし、受身・使役・尊敬などを意味する「る

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
る・らる／す・さす	4	1	10	10	1
なり（指定）	5	4	2	2	0
たり（指定）	0	0	1	0	0
ず	0	0	1	2	2
つ	3	7	0	3	0
ぬ	18	17	3	6	2
たり（完了）	3	0	0	0	0
計	33	29	17	23	5

表五　上接助動詞の分布

／らる」「す／さす」については、細別する意味が乏しいと見て便宜一括して示す。

表五の分布で、比較的めだつのは、次の点である。

キ　助動詞「ぬ」に付く用法が中世には減少している。

助動詞「ぬ」に付く用法と、「べし」の意義との関係を、その例の多さがめだつ『蜻蛉日記』『源氏物語』について調べてみると、『蜻蛉日記』では、「ぬ」に付く十八例中の十例が意義的には結果を推定対象とするものであり、状態を推定対象とする六例がそれに次いでいる。『源氏物語』では、十七例中の十三例が意義的には結果を推定対象としている。総合すれば、中古には状態や結果を推定対象とする場合に、「ぬべし」の形で用いられることが多く、その状況の中世における後退が、「ぬ」に付く用法の相対的な減少傾向を示すことになったようである。表四・カに指摘した、助動詞に付く例の減少傾向は、「ぬ」に付く「ぬべし」の用法の減少に代表されることになろう。なお、「ぬべし」の用法の減少には、「つ」との分担体制の中世における崩壊と関係する可能性もなくはないが、その割りには「つ」に付く例が調査の分布上めだたない。この調査の範囲では、むしろその点まではわかりかねると見るべきであろう。

上接語との関係については、『御伽草子』に、動詞の未然形と見うる形に「べし」が下接した、次のような例が拾えた。中世の「べし」に、このように崩れた承接法が混じってくることはすでに知られている[4]が、調査の範囲にも、それが一例顔を出している。

(16)「わが姫たち今度はきかせべく候あひだ、今一度おもしろく引給へ」と申ける。（伽・文正さうし）

以上の上接語についての変化を、オ・カの指摘を中心にまとめれば、次のクのようにいえよう。

ク　「べし」の上接語にはもともと動詞が多いが、中世

には、その傾向がより強くなっている。

次に、下接語と文末用法のありようについて調べた結果を述べる。下接語については、活用形の別に直下の語を語別に調べ、それを「べし」の活用形と併せて、表六に示す。

直下の語が活用語の場合は、それ以下のありようも例によって異なるが、それ以下の細かいありようは切り捨て、終止形で示した。連用形への下接語については、直下に係助詞が介入する場合もあるが、その場合はそれを越えて、連用形とより直接的な論理関係にある語の表示を優先させた。たとえば、「すべくも思へらず」は、「べくも」の「も」より、その後の動詞「思ふ」との関係を重視して、「べく……動詞」の形でまとめた。また、「いらせ給べうや候らむ」は、「べうや」の「や」より、その後の「候ふ」との関係を重視して、「べく……補助動詞」にまとめた。連体形については、「べきなり」の形を一般の準体法とは区別して示したので、準体法には、「べきなり」の形を除き、格助詞が付くなどした明らかな準体法の例数だけを示している。

表六　下接語・文末用法の分布

		蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
未然形	べからむ	0	2	0	1	0
	べからず	0	0	2	8	7
連用形	べく……動詞	0	6	0	1	0
	べく（被語略）	0	2	0	0	0
	べく……補助動詞	3	2	2	1	2
	べくは	1	0	2	1	0
	べくながら	1	0	0	0	0
	べくもがな	0	1	0	0	0
	べかりき	0	0	3	1	0
	べかりけり	4	3	0	1	0
	べかりつ	2	0	0	0	0
終止形	終止法	25	18	32	46	38
	べしかし	0	1	0	0	0
連体形	連体法	38	43	18	18	22
	準体法	2	6	1	0	0
	確言系係結の結び	4	5	0	0	0

	疑問系係結の結び	5	2	15	10	14
	疑問詞……べき	0	0	1	2	5
	連体形終止法	1	0	0	0	4
	べきなり	0	4	10	8	6
	べきか（は）	1	0	3	1	1
	べきかな	1	0	0	0	0
	べき＋接続助詞	3	2	9	1	1
	べかんなり	0	0	1	0	0
	べかめり	4	2	0	0	0
已然形	べけれ＋接続助詞	5	0	1	0	0
	確言系係結の結び	0	1	0	0	0

表六から、下接語・文末用法の分布について通時的変化がうかがえるのは、次のような点である。先に増加傾向をまとめ、減少傾向は後にまとめて示す。

ケ　助動詞の付く用法では、未然形の「べからず」、連体形の「べきなり」の形が、中世に増加している。

コ　終止形の終止法が中世には増加している。

サ　連体形に、疑問系係結の結びと「疑問詞……べき」が、中世には増加している。

シ　連体形に、連体法・準体法・確言系係結が、中世には減少している。

ス　連用形・已然形は、減少傾向にある。

まず、ケに指摘する用法のうち、「べからず」の増加は、後に述べる否定表現における使用の増加と同じ方向にあると見てよい。

「べきなり」は、「べし」の対象的意義を指定辞「なり」の賓語とする説明的な語法であるが、すでに述べた観念的な意味あいの通時的な強化と連動する現象である可能性もある。ただし、この例数は「べきに（も）あらず」などの形もまとめての分布なので、これも否定表現における使用の増加につながる点がある。[5] 次にその一例を示す。

(17)既に詔命を下さる。子細を申にところなし。たゞすみやかにまいらせ給べきなり。（覚一本平家・一・二代后）

・今度は待賢門より入御あるべきにて、中御門を西へ御出なる。（覚一本平家・一・殿下乗合）

・さしてあるべきならねば、名残つきせず思へども、空しき野辺に送りすて、華の姿も煙となる。（伽・鉢かづき）

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
終止形終止法	25	19	32	46	38
確言系係結の結び	4	6	0	0	0
疑問系係結の結び	5	2	15	10	14
疑問詞……べき	0	0	1	2	5
連体形終止法	0	0	0	0	4
計	34	27	48	58	61

表七　広義終止法の分布

しかし、表六・ケの指摘は、助動詞の下接全体から見れば、むしろ特殊であり、連用形による「べかりけり」、連体形による「べかめり」などは逆に減少しているから、助動詞の下接が全体として増加しているわけではない。

表六・コの終止形終止法の中世における増加は、他の活用形などによる、より広義の終止法の増加にもつながる可能性がある。そこで、コの終止形終止法や、サの疑問系係結の結びなどの増加を中心に、「べし」自体を文末とする広義の終止法を集計してみると、次の表七のような分布になる。

表七の分布からは次のようにいえよう。

セ　中世には、「べし」による広義の終止法が漸増している。

なお、表六・七の連体形終止法は、中古と中世、特に室町期とでは、その表現性が明らかに異なるものである。中古では、詠嘆的な表現性を備えた狭義のそれであったが、『御伽草子』の四例は、連体形の終止形同化の進行に伴うものであり、活用語一般にとってそれが標準的な終止法になっていく時代の趨勢の反映と見てよい。中古における詠嘆的な終止法のそれとしての例は、調査の対象範囲には認められなかった。

しかし、連体形に「かな」を下接した「べきかな」の例が、『蜻蛉日記』の調査範囲に一例現れている。その表現価値は本来の連体形終止法に近いと見うるので、ここにその例を示しておく。

⑱「……このたびさへなうは、いとつらうもあるべきかな」など、まめ文の端にかきてそへたり。（蜻蛉・上・天暦八年夏）

意義的に大別して現実的な事柄が中世に減少していることは、すでに表二・ウに指摘したところであるが、例⑱のような詠嘆表現との共起は、逆に中古における「べし」の現実的な事柄の表示性の強さをうかがわせるものといえる。

表六・シに指摘した、連体法の中世における減少についても、少し補足しておきたいことがある。連体法について

		蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
現実的	状態	14	11	3	2	0
	結果	11	16	5	7	5
	可能	7	8	2	7	8
観念的	適当	0	5	2	0	7
	当為	6	3	6	2	2
計		38	43	18	18	22

表八　連体法の意義別分布

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
現実的	32	35	10	16	13
観念的	6	8	8	2	9
計	38	43	11	18	22

表九　対象的意義の大別による連体法分布

意義別の分布を調べると、次の表八のようになる。

この表八の意義別の分布を、現実的な意義と観念的な意義とで集計しなおすと、表九のようになる。

そこで、表八・九の分布については、次のようにいえよう。

ソ　連体法の中世における減少は、状態を推定対象とするものをはじめとする現実的な意義の用法にめだち、観念的な意義の用法においての変化は、特にめだたない。

さて、先述の表七・セに指摘した、広義の終止法の漸増に、表六・シに指摘した準体法の減少や、表六・スに指摘した連用形・已然形の減少傾向などを総合すれば、下接語・文末用法から見た「べし」の用法は中世のほうが狭くなっていることになる。先述の上接語についてのクの指摘と、この下接語・文末用法の狭まりとをさらに総合すれば、中古の「べし」のほうが、上接語・下接語のいずれから見ても、種々の用法により広く用いられたこともうかがえるのである。このような中世における用法の狭まりは、「べし」の文語化に伴う自然の結果と見てよいであろう。

四の二　その他の共起関係から

以上の形態と意義から見た調査で得られた通時的変化の傾向の中には、「べし」とただちに接しない語との共起関係にも連続するものがある。その意味で、すでに得られた変化の傾向を手がかりに、もう少し広く「べし」との共起関係の変化を探ってみよう。

表六・サに指摘した疑問系係結の結びと「疑問詞……べき」の中世における増加には、たんなる疑問表現での使用よりも、反語表現における使用の増加が予想される。疑問詞・疑問助詞は、「誰かは劣るべき」とか、「しかるべき身かは」のごとく、「べし」と離れた位置においても、反語表現をつくることが多い。そのような形にも「べし」の用法としては連続性を認める必要がありそうである。そこで、そういう形も含めて、すでに見てきた調査範囲で反語表現に用いられた例を調べ、それを疑問詞と共起する不定方式（疑問助詞も共起するものと、疑問詞のみ共起するものとがある）の例と、疑問助詞のみ共起する特定方式[6]の例に分けてみると、表十に示す分布になる。その傾向を、次のタに示す。

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
疑問詞と共起する例	2	0	17	13	15
疑問助詞のみ共起する例	4	0	3	1	2
計	6	0	20	14	17

表十　反語表現における使用

タ　中世には反語表現における使用が増加している。

反語表現は、意味上、否定表現に通じるものである。そこで、次に否定表現の分布についても調べてみた。「べし」の直下に打消の助動詞が接する「べからず」については、表六・ケに指摘した通り、中世に増加していた。その周辺には、「べくもあらず」「べきにもあらず」「べき程ならず」などの形で、下に打消の助動詞「ず」が共起する否定表現もあれば、「べき方なし」「べき人だになし」などの形で、下に形容詞「なし」が共起する否定表現もある。表六・ケに取り上げた「べからず」の形も、「ず」が共起する前者に含め、これまでの調査範囲で、「ず」、「なし」がそれぞれ下に共起する例数を示せば、表十一のような分布になる。そこにうかがえる傾向を、次のチに示す。

	蜻蛉日記	源氏物語	平家物語	太平記	御伽草子
「ず」が共起する例	5	7	16	14	14
「なし」が共起する例	1	5	3	4	10
計	6	12	19	18	24

表十一　否定表現における使用

チ　中世には否定表現における使用が増加している。

思うに、反語表現は一般に疑問形式を採りながら、表層とは逆の正答案を反転的に確認主張する、強い情意を担うことを特徴とするものである。また、否定表現も、現実をたんに模写しても成り立つ肯定表現に比べると、やはり志向的・主張的な情意を伴いがちである。反語表現と否定表現とは、その意味で、より包括的には志向的な情意性を共有するといえよう。

タ・チの傾向は、中世に向かって「べし」の使用される表現に、志向的な情意性が強まることをうかがわせるものである。そういえば、すでに表三・エに指摘した、意志・命令などの作用的意義の両立する割合の中世における増加も、それを示すものであった。しかし、それらの現象はおそらく、すでに表二・ウに指摘した、観念的な事柄を推定対象とする割合の増加傾向にもつながるものである。どちらかといえば、観念的な表示性の強まりをこそ本質とする変化の、むしろ現象的な現れと見ることができる。そこで、ウ・エ・タ・チの指摘をまとめれば、次のツのようにいうことができよう。

ツ　中世には、観念的な事柄の表示性が強まり、それに伴ってより現象的には、反語・否定・意志・勧誘・命令などの志向的な情意を担う傾向が強まっている。

観念的な表示性の強化については、以上のほかにもめだつ兆候がある。『蜻蛉日記』『源氏物語』では、形容詞に付く例は状態・結果を推定対象とするものに限られ、形容動詞に付く例は状態を推定対象とするものに限られていた。ところが、『平家物語』には、少数ながら、形容詞に付く例で当為を推定対象とする例や、形容動詞に付く例で適当を推定対象とする例が、それぞれ次のように姿を表している。

(19)勲功一にあらず、恩賞是おもかるべしとて、次の年正三位に叙せられ、（平家・一・鱸）

(20)母とぢ是をきくにかなしくて、いかなるべしともおぼえず。（平家・一・祇王）

(19)の「おもかるべし」は、恩賞を重くしなくてはならないの意で、当為を推定対象とする例と解せるものである。(20)の「いかなるべし」は、どうすればよいの意で適当を推

定対象とする例と解せる。形容動詞を上接語とする例には、もう一例も、前後の文脈を含めてこれと全く同文の例が同じ作品にあった。なお、調査した範囲の上接語形容動詞には、この二例以外に疑問詞からなる例はなかった。このような例の出現も、表二・ウで指摘した観念的な推定対象の増加と、その原因となる観念的な表示性の強化の現れと見ることができよう。

五　おわりに

「べし」の通時的変化について、本稿の要点をまとめると、次のようになる。

一、中世の「べし」には、位相的に文語化が進行するが、中世には意義上、現実的な事柄の表示性が後退し、観念的な事柄の表示性が強くなる。また、それに伴って、反語・否定・意志・勧誘・命令などの表現に用いられることも多くなっている。それだけいわば志向的な情意の表示性が強まっているのである。

二、形態的には、中古のほうが、上接語・下接語に種々の広がりが見られた。中世には相対的に用法が狭くなっている。それも文語化に伴う自然の結果であろう。

文語における用法を含めて、調査範囲の「べし」にうかがえる通時的変化はこのようなものであったが、中世になると、口語の世界で「べし」が用いられることは、次第に少なくなっていったと見てよい。中古の「べし」には、周知のように打消の推定を表す「まじ」が意義的に対応し、推量の助動詞「む」には、打消推量の「じ」が対応していた。中世口語では、その「まじ」と「じ」の両者をいわば統合する形で、助動詞「まい」が形成され、それらに取って替わるから、中古語的な「べし」の位置は、その統合された打消の「まい」との相対関係だけからも、口語の世界では衰退せざるを得なくなっていたはずである。そう考えると、これらの通時的変化は、一面では中世を境として「べし」が次第に文語化する過程のようにも思えるのである。

注

(1) 山口堯二「推量体系の史的変容」(『国語学』一六五集)

(2) 中西宇一「「べし」の推定性――様相的推定と論理的推定および意志――」(『古代語文法論　助動詞篇』六、平成八年、和泉書院)に、氏は次のようにその見方を総括している。

「べし」の推定は、〈ソウダ〉と〈ハズダ〉の二系列に大別することができる。両者はいずれも「必然の推定」を意味するが、その推定把握の仕方を異にする。すなわち、「ソウダ」は、対象自体に存する必然の結果として把握される「現実的・様相的な推定」であり、「ハズダ」は、物

事のことわりによる必然の帰結として把握される「観念的・論理的な推定」である。

氏の見方は「「べし」の多様な意味を整理する上で有意義であろう」（高山善行氏書評『国語学』一九五集）と見られる。筆者もそう評価してきた。ただ、本稿の立場から見れば、その「現実的」と「観念的」とは、ともに対象面のありようと見なせるもので、筆者も重視したい観点であるが、それらと併用されている、「様相的」と「論理的」とは相対する概念とは考えにくい。「様相的」は現実的な対象面のありようが中心になりそうであるのに、「論理的」のほうは、必ずしも観念的な対象のありように限らない、「べし」の推定作用全体の特徴だと思えるからである。氏の大別法の基点と見うけられる〈ソウダ〉と〈ハズダ〉という二つの訳語も、用例の解釈上両者に二者択一という条件を課さない限り、どちらも採用可能な例がむしろ多いのではないだろうか。

（3）カの形容詞に付く例については、「何か苦しかるべき（ぞ）」という慣用句の例が、『平家物語』に一例、『太平記』に一例あるが、『御伽草子』の三例は、すべてこれであり、慣用句性のある例を除いて、より自由に用いられた例を中心に見れば、その傾向はさらに顕著になる。なお、この種の言い方が比較的後まで慣用された言い方であったことは、以前にも触れたことがある。山口堯二「反語副詞「なにが」の形成」（『佛教大学文学部論集』第八二号）。

（4）橋本四郎「ベシ・マジの接続面の混乱」（『国語学』二二集、『橋本四郎論文集国語学編』昭和六一年、角川書店）に、その広がりの見通しと、推量の助動詞の変遷の方向と絡めた原因の考察がある。

（5）否定と共起する例の有無も示す意味で、「べきなり」の内訳をいえば、『源氏物語』では、「べきならず」「べきにもあらず」「べきなめり」「べきななり」各一例で、計四例、『平家物語』では、「べきならず」二例、「べきに（も）あらず」三例、「べきにて」三例、「べきなり」「べきなれども」各一例で、計十例、『太平記』では、「べきにあらず」三例、「べきなり」二例、「べきにて」「こそ…べきなれ」「べきなれども」各一例で、計八例、『御伽草子』では、「べきに（も）あらず」四例、「べきならず」「べきなり」各一例で、計六例という分布である。

（6）山口堯二『日本語疑問表現通史』（平成二年、明治書院）の用語による。